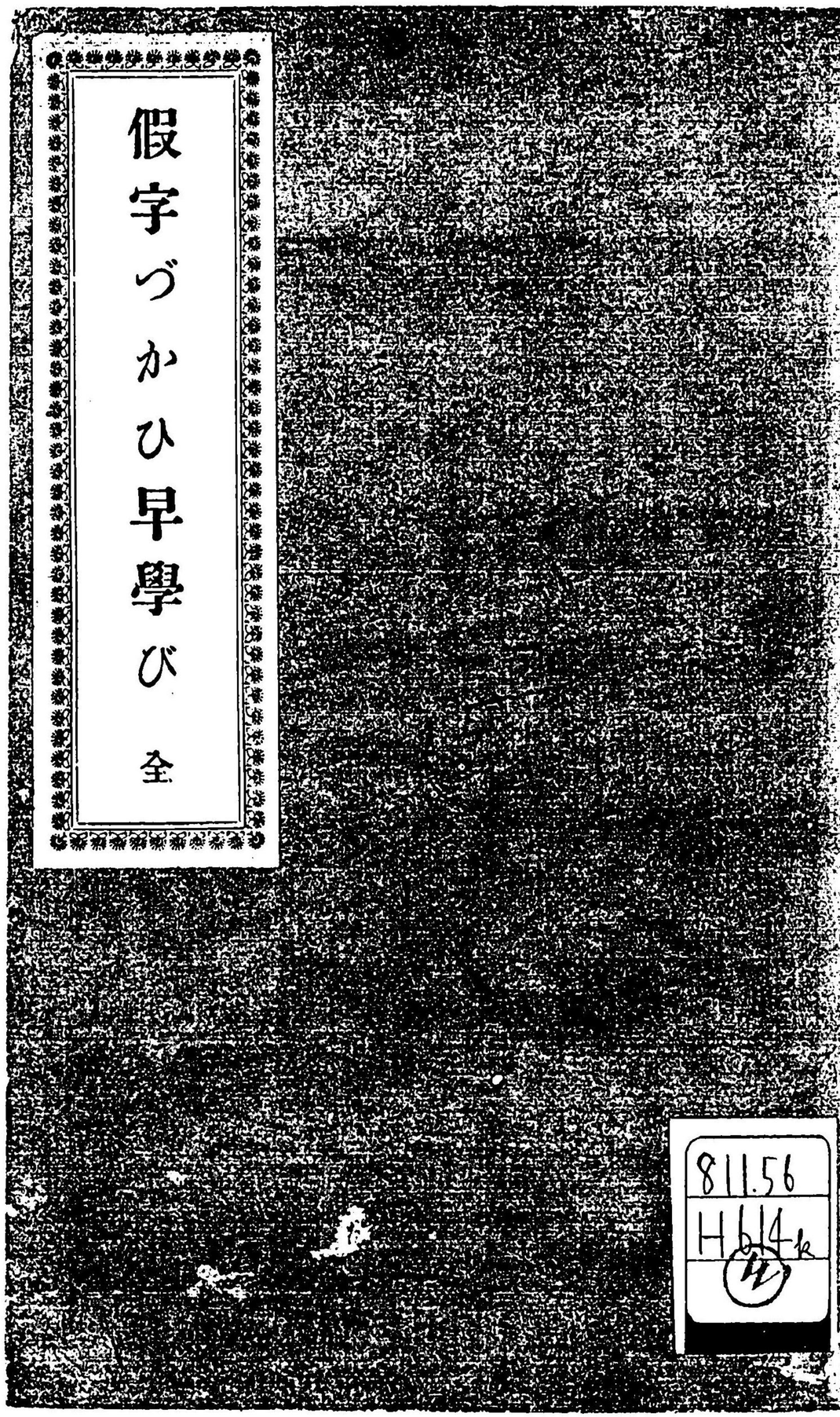


077077-000-6

811.56-H614k

仮字づかい早学び

帆足　正久／著

M25. 2

DAC-0261

第一高等中學校教授　久米幹文君校閲
千葉縣講典講究所講師　帆足正久著

假字づかい早學び　全

東京博文館藏版

国立国会
29.7.22
図書館
336631

みくは言葉ハうのことそのものゝこゝろばへをたもてる音どもをもてくみあはせたるものおればそのこゝばへよかおふべき假字どもをもてしるすべきを初學のともがらハたゞその言葉よよびのかおへるをさへあてしるせばとてものしつれはあらぬこゝろばへなる音どもをあてしるすことすくなからねは假字のかなハざるのみあらず言葉をさへあさぬ事などいとれほかりさればまつ音のこゝろばへをわ

811.56
H614k

みくゝ言葉ハろのことそのものゝこゝろ
ばへをたもてる音どもをもてくみあはせ
たるものあればそのこゝばへよかおふべ
き假字どもをもてしるすべきを初學のと
もがらハたゞその言葉よびのかおへる
をさへあてしるせばとてものしつれはあ
らぬこゝろばへなる音どもをあてしる
すことすくなからねは假字のかなハざる
のみならず言葉をさへおさぬ事などいと
れほかりされゞまつ音のこゝろばへをわ

きまへれきてものすべけれどそれたわやすきわざならねへこの巻をよくあぢはひれきてそのかなふべき假字づかひをさとるべしれのれれほけなけれど初學のともがらはこのたよりをにしめんとてかくなむ

明治廿四年三月　肥の國人　帆足正久しるす

假字づかひ早學び

久米幹文校閲
帆足正久著

假字づかひはあづかるものハ五十音の阿行（アイウエオ）波行（ハヒフヘホ）也行（ヤイユエヨ）和行（ワヰウヱヲ）の四行と濁音の佐行（ザジズゼゾ）多行（ダヂヅデド）の二行と音便との三種としるべし

此の内まがひやすき假字ハ先づ阿行の

い波行のひ利行のねよていひぬの三つ
あり
假令へは老いとかくべきをれひ憂ひと
かくべきをうれい率ねとかくべきをひ
きひあどかきたがふることあるが如し
次ゟ阿行のゑ波行のへ和行のゑにてに
へゑの三つなり
假令へバ絶とかくべきをたへ添へと
かくべきをそゑ植ゑとかくべきをうへ
あどかきたがふることあるが如し

次ゟ阿行のれ波行のほ和行のをにてれ
ほをの三つなり
假令へバ衣織きぬれるとかくべきをき
ぬをる馨かをるとかくべきをかほる直
なほるとかくべきをおをるなどかきた
がふることあるが如し
次ゟ阿行のう波行のふよてうふの二つ
あり
假令へバ心得こゝろうるとかくべきを
あゝろふる調ちゝのふるとかくべきを

とゝのうるゐどかきたがふることあるが如し

次は波行のは和行のわにてはわの二つなり

仮令へば變(カハル)かゝるとかくべきをかわる斷(コトワル)ことわるとかくべきをことはるなどかきたがふることあるが如し

次に濁音の佐行のじ多行のぢにてじぢの二つなり

仮令へば交(マジル)まじるとかくべきをまぢる

をぢなしとかくべきをじゐしなどかきたがふることあるが如し

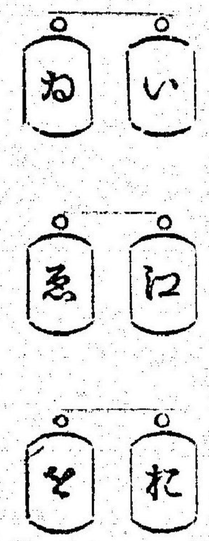
次は佐行のず多行のづにてずづの二つなり

仮令へば撫(ナヅル)なづるとかくべきをなずる千(ダヾメム)たゝずむとかくべきをたゝづむなどかきたがふることあるが如し

今そのまがひを差別して一ッ一ッはしめすべし

先つ阿行と和行とまがひやすきをあぐれ

べ



の如し

此の圖のうちのいとねとの差別をねの假字にかくべき限りをあげて外ハ皆ねの假字ゝあらぬことをしめすべし

ねの假字之部

ね　居　井

ね　根　猪

ね　蘭

ねや　禮

ねやまふ　敬

ねのこ　豕

ねもり　蛸

ねで　堰樣

たねね　田井

いたね　板井

かなづねる　桔槔

ねやまふ　禮

ねる　居

ねやじろ　禮代

ねやゝか　禮

ねざり　膝行

ねのしゝ　猪

ねぐひ　堰樣

いさちね　小井

おほね　莞

ねやひ　禮

ねる　居座

336631

いへゐ　家居　はしゐ　端居
かもゐ　鴨居　くもゐ　雲居
とりゐ　鳥居　ゐなか　田舍
ゐさらひ　臀　ゐせき　堰棣
あゐ　藍　あぢさゐ　紫陽花
ゐほさゐ　潮左爲　くわゐ　烏苧
ゐ　地震　ゐまゐ　澤寫
うゐ　髻髮　くれなゐ　紅
かたゐ　乞兒　くらゐ　位
とのゐ　宿直　もとゐ　基

ひきゐ　率　ゐる　率
もちゐ　用　まちゐ　待居
まゐる　參　まゐづる　參
まゐらする　參　つきゐ　急息
まなゐ　眞名爲　まどゐ　圓居

以上の詞どもをよくあぢはひおきてこの外の詞ハ皆いの假字とこゝろうべし

次ようとゑとの差別をゑの假字ようかくべきかぎりとあげて外ハ皆ゑの假字をらぬことをゑめすべし

ゑの假字之部

ゑ　餌
ゑぬ　犬
ゑみ　咲
ゑぐ　惠具
ゑゐぐ　涙
ゑづぐ　餌付
ゑらぐ　嘘
ゑま　繪馬
ゑた　穢多
ゑ　繪
ゑる　彫
ゑひ　醉
ゑぐし　酸
ゑづく　吐啀
ゑとり　屠兒
ゑのぐ　繪具
ゑ　穢
ゑど　穢土

ゑと　糞
ゑあてせ　繪合
ともゑ　巴
ゑぼし　烏帽子
ゑまはし　可咲
ゑんず　怨
ゑんば　蜻蛉
こゑ　聲
こずゑ　梢
すゑ　陶
ゑぶくろ　餌袋
ゑどる　綵
ゑんず　槐
ゑまし　可咲
ゑづらか　笑嗤
ゑる　嘲
ゑぐる　刳
すゑ　末
すゑ　假髮
すゑもの　土燒

ちゐ　智恩　つく　机
つゐ　杖　ゆゐ　故
ふづくゐ　文机　かせづゐ　横首杖
ゆゐづく　故　ゆゐ〳〵し　故
うゐ　植　うゐ　飢
うゐき　植木　うゐじに　飢死
すゐ　居　すゐ　座
いしすゐ　礎　くゐ　蹴
くゐまり　蹴鞠　ゐら〳〵　嘷聲
ゐばむ　餌食　ゐまぐ　餌覓

ゐさ　魚餌　ゐがふ　餌養
ゐつぼ　餌壺　ゐさしざを　餌刺竿
ゐがく　畫　ゐくぼ　靨
ゐりまき　彫卷　ゐざう〳〵　繪册子
ゐし　繪師　ゐほん　繪本
ゐがき　畫師　ゐとり　餌鳥
ゐとり　餌取　ゐすりこき　餌摺粉木
ゐすりはち　餌摺鉢

以上の詞どもをよくあぢはひれきてこの外い皆ゐの假字とこゝろうべし

次にれとをとの差別ををの假字はかく
べき限りをあげて外へ皆をの假字なら
ぬことをしめすべし

をの假字之部

と　を　雄　を　小
を　を　緒　を　尾
を　を　脉　を　男
を　を　唯　を　折
をめく　をゆ　叫　を　庠
をり〳〵　をる　時　を　居

をつ丶　を　現　を　招
をどり　を　媒鳥　を　彼
をち　て　往　て　彼方
をちかへる　をとつひ　彼歸　を　前々日
をせる　をぢ　晛　を　老
をぢなく　をこづる　懦弱　を　誘
をぎ　を　荻　を　食
を〳〵　をしむ　鴛鴦　を　愛
を〳〵へ　をゝり　教　を　撓
をのこ　をうと　男　を　夫

をのこで　男兒
さつを　獵師
ゐとん　紫苑
ゐをる　萎
たをやか　嬋妍
たをむ　橈
とを丶　撓
ひをむし　蜻
たをり　山撓
まをす　申

うへを　後男
たけを　壯士
しをり　栞
しをる　呵責
たをやめ　美女
とをむ　撓
とと〳〵　撓々
つゞらをり　九折
たをる　手折
やをら　徐々

さをぎ　徘優
あをむ　青
あをかへる　蝦蟇
あをのり　陟釐
あを　禊子
ゐさを丶　功勳
うを　魚
ひを　氷魚
しらうを　白魚
さを　竿

あを　青
あをかひ　螺鈿
あをひとぐさ　蒼生
あをむし　螟蛉
いさを　勳功
いを　魚
とひを　鰩魚
はりを　針魚
いをめ　肬
とを　十

からさを　連枷
みゐれざを　水馴竿
ひさを　火竿
えもんざを　衣竿
さしざを　刺竿
さをいれ　竿入
ばせを　巴焦
を　苧
みをづくし　澪標
を　岑

みざを　水竿
ふゐざを　舟竿
ゑさ〜ざを　餌刺竿
きせるざを　煙管竿
けんざを　間竿
さをだけ　竿竹
みさを　操
みを　水脉
ほそのを　臍帶
をのへ　岑上

をぐるま　小車
をす　簾
をうな　女
をかつゞし　茵芋
を　唯
をけら　朮
をでし　艦
むらをさ　村長
をさむ　治
を〜　愛

をぐし　小櫛
を丶〜　雄
をうゐで　女
を丶　唯
をしく　警蹕
をて　愚戯
さとをさ　里長
をざし　鮫
をさ〜〜　男ヲシイ
をしき　折敷

をしへで　弟子
をしもの　食物
をこ　虚言
をたけび　雄詰
をちかた　彼方
をぢ　伯父
をつ　初メニ却ル
をつゝ　現在
をとゝし　一昨年
をのゝぐ　戰慄
をす　食
をそ　獺
をこがまし　幼戯
をち　遠
をちこち　遠近
をぢ　父兄
をちかへる　同上
をとつひ　一昨日
をての　手斧
をば　伯母叔母

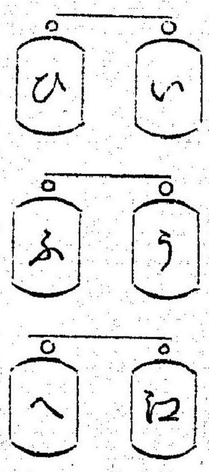
をり　檻
をゝしい　勇壯
をひこ　竹刀
をつ　堅魚
かをる　薫
こをゞい　紅梅
さるをかぜ　松蘿
をとこ　男
をとめ　少女
をどる　踊
をぐな　童男
をがむ　拜
をろがむ　拜
をしね　晩稲
をさ　筬
をさ　譯
をさ〳〵　專
をか　岡
をひ　甥
をそ　嘘

をそ　獺　をけ　桶
をの　斧　をのて　尾籠
をかし　可笑　をろち　蛇
をさぎ　菟　をぢ　叔父
をはり　終　をふ　竟
をみな　女　をみなへし　女郎花
をさなし　稚　をきむし　蚘蠖
をのゝぐ　惜　をしかゝ　韋
とろ〳〵　蛇ノ歩クサマ、をろつく　驚騷

以上の詞どもをよくあぢゝひおきてこの外ゝ皆おの假字とこゝろうべし

次ゑ

次ゑ阿行と波行とまがひやすきをあぐれば



の如し

此の圖のうちのいとひとの差別をいの假字よりかくべき限りをあげて外ゝ皆いの假字ならぬことをしめすべし（中下のみにいの假字あるをあげて上につく假字はあげず）

いの假字之部

ゆみいる　射
さいづち　削槌
ついせ　弊
たいぐし　曲々
くい　悔
ひいづる　秀
れいべむ　老
さいくし　漬々
あさいす　朝寐
かい　蚘
れいかけ　綬
ついまつ　松火
ほいなし　本意無
れいらか　寛大
れいさらべふ　老衰
のいづみ　肉刺
いいる　俗
さいくし　辨
かい　櫂
むくい　報

をい　老

以上の詞どもをよくあぢはひをきてこの外ゝ皆ひの假字とこゝろうべゝ

次にうとふとの假字をうの假字にかくべき限りをあげて外ゝ皆うの假字にあらぬことをしめすべゝ

うの假字之部

こゝろうる　心得
もちうる　用
いうそく　有織
ひきうる　率
せう　兄鷹
ほうげづき　佛クサイ

ほんじやう　本姓
どうもなし　平氣
かうさく　打上
かへせうにう　殺生
れんやう　例樣
そーう　細
らう〳〵　勞
らうたし　勞度
らうがはし　騷亂
らうある人　功人
れいさうす　御座
おもやう　面樣
れうな　老女
たうめ　老女
くうづき　功
けしう　變樣
げせう　顯
けさう　假裝
けさうづ　戀着
けうら　清淨

こうづ　困
まうと　貴樣
まうけ　設
けうとし　疎
でうがく　調樂
あうなく　不遠慮
さうぞし
さうどく　騷
きやうざく　警策
ひざう　非常
れうおく　分別無
まろうど　客人
まろけもの　引出物
てうど　道具
てうず　調
さうぞく　裝束衣
さうぞし　雜々
さるやう　子細
めうつー　目移
びさうおし　無美相

せうそこ　消息　せう〻ら〻　川遊
すうる　居　う〻いる　植
つきうる　急息　う〻いる　飢
そうる　座

以上の詞どもをよくあぢはひをきてこの外へ皆ふ〻の假字とこゝろうべし

次は〻と〻との差別を〻の假字にかくべき限りをあげて外へ皆〻の假字ならぬことをしめすべし

〻の假字之部

にあに　得　あに　肖
あに　熟　あら　濺
あまに　甘　ゐに　愈
いに　嘶　れび　恊
れほに　覺　れもほに　所思
きに　消　きこに　聞
くに　崩　こに　越
こに　肥　さに　寒
さかに　榮　しなに　萎
ろびに　聳　すにる　餒

あにか　柔弱
ぬに　鵠
たに　絶
はに　生
ほに　吠
みに　所見
わかに　若
ひに　稗
さゞに　榮螺
ぬにくさ　偃草

さすに　捲
いりに　入江
つひに　瘠
ひに　冷
まみに　見
もに　燃
をに　瘁
ふに　笛
ひこに　杪
かもに　鴨柄

ひにどり　鵯
さに〳〵し　花ヤカ
えあらず　一通デナイ
えんだつ
えせもの　不者
えさらぬ　逃難
ざえ　才能
ひこべえ　蘗
きのえ　甲
にえ　煎

あこに　距
なほにあらず
えんなり　風流ナ
えうず　要
えぶの身　凡夫
あえもの　アヤカリモノ
もえぎ　萠黄
さゝえ　小筒
つひえ　費
ええ　映

もえ　萠
きこえかへす辞退
ゆふべえ　夕榮
さえ　汗
ほづえ　上枝
松がえ
さゐ　嘶
ながえ　長柄
しらゐのなきなた
へえ　鯢

きこえまうす辞退
きえかへる　死人
せうえう　殺生
まりこえ　鞠蹴
しづえ　下枝
梅がえ
うべえ　嘶
ながえ　轅
白柄薙刀

以上の詞ともをよくあちゐひをきてこの外ゐ皆へ〜の假字とこゝろうべし

次に波行と和行とまかひやすきをあくれば

ゐ　ひ　ふ　へ　ほ
わ　ゐ　う　ゑ　を

此の圖のごとくゐとわとの差別をわの假字にゐくべき限りをあげて外ゐ皆わの假字ならぬことをしめすべし

わの假字之部

あをつ　周章　いわけな〜　稚

あわたゝし　惶遽
うわる　植
かわらか　燥
さわぐ　騒
さわやか　爽
さわたつ　爽
ずわゐ　條
たわ　撓
たわゝ　撓々
たわら　俵

いわし　鰯
かるく　乾
くわる　烏苧
さわがゝ　騒動
さわやぐ　爽
すわる　居座
たるむ　撓
たわゝ　撓々
たわやか　嬋妍
もわう　硫黄

よわし　弱
よわる　弱
よわげ　弱氣
あわしほ　白墟
みなわ　水泡
しわむ　雛
みるし　酒瓮
おほわ　輞
くるわ　廓
ことわり　理

かよわし　弱
よわむ　弱
あわ　泡
あるゆき　泡雪
しわ　皺
ひわ　髄
うらわ　浦回
くつわ　轡
ことわざ　諺
こわね　聲音

おわいろ　聲色　こわづくり　聲作
こわさま　聲樣　こわたか　聲高
こわづかひ　聲遣　こわたら　聲絶
こわひゞき　聲響　こわぶり　聲風
しわざ　作業　のわき　野分
はらわた　腸　さわ〳〵　騷

以上の詞ともをよくあちはひれきてこの外ゝ皆はの假字とこゝろうべし

次に濁音の多行と佐行とまがひやすきをあぐれば

ぢ　で　ど
じ　ぜ　ぞ
づ
ず

此の圖のうちのぢとじとの差別をおの假字ゝかくべき限りをあげて外ゝ皆じの假字にあらぬことをしめすべし

じの假字之部

あぶか　簀　あじろ　網代
あじろき　網代木　あまじゝ　癒肉
いちじるし　著　いちじろし　著
かじく　憔悴　かじる　咒咀

かたじけな〜辱
くじく　折
さしき　假庇
しゞむ　縮
しゞかむ　縮
たじろく　辟易
なじる　詰
にじよぶ　呻
はじかみ　薑
はじく　彈

くじか　擘
くじる　抉
しゞみ　蜆
しゞまる　縮
しゞらき　繊
つじむ　瘍
なまじひ　憖
にじる　蹂
かはゝじかみ　呉茱萸
はじむ　始

はじまる　始
ひじきも　鹿尾菜
はじゝ　脯
まじもの　厭魅
まじり　交眦
まじる　交
まじろく　瞋
むじな　狢
やじり　鏃
あるじ　饗

ひじき　鹿尾菜
ひじり　聖
まじなふ　禁厭
まじる　交
まなじり　眦
まじふ　交雑
みじかし　短
めむどき　荒蔚
あるじ　主
いみじ　甚

うじ　蛆
れなじ　同
きじ　雉子
さじ　匙
つじ　辻
つゝじ　躑躅
つむじ　颯
とじ　刀自
いへとじ　家刀自
にじ　虹
うなじ　項
れやじ　同
くじ　籤
すさまじ　荒涼
つじうら　辻占
いはつゞじ　躑躅
つむじ　廻毛
はゝとじ　母刀自
とじもの　綴物
ぬじ　虹

はじ　櫨
ひつじ　羊
むらじ　連
そじ　膂宍
はじめ　初
かもじもの　鴨自物
うじもの　鵜自物（何自物ハ皆ヒになり）
かたじけなゝ　忝

はじゆみ　櫨弓
ふじ　富士
もじ　文字
ねこじ　掘
犬じもの　犬自物
しゝじもの　猪自物
おのがじし　己繁々

以上の詞ともをよくあちあひおきてこの外ハ皆ぢの假字とこゝろうべし

次にづとずとの差別をずの假字にかくべき限りをあげて外へ皆ずの假字よあらぬことをしめすべし

ずの假字之部

ず　不　ずさ　從者
うすゞまる　群集　すゞき　鱸
すゞし　涼　すゞむ　納涼
すゞめ　雀　すゞろ　漫
たゝずむ　彳　なずらふ　準
ねずみ　鼠　うず　髻華

かず　數　かずまふ　數
きず　疵　きずつく　傷
くず　葛　すず　錫
すゞ　鈴　すゞむし　鈴虫
はず　筈　はねず　唐棣花
みゝず　蚯蚓　もず　鵙
さずき　假庖

以上の詞ともをよくあぢはひわきてこの外へ皆づの假字とこゝろうべし

次ゝ音便の假字づかひよて幸さきへひ

をさいゝひ妹人いもひとをいもうとか
どかく類なり如此音のうつりゆくいき
よりいゝよりいゝかよりうくよりういよ
りうゝひよりうゝふよりうゝへよりうゝほより
うゝまよりうゝみよりうゝむよりうゝりよりうゝ
ゐよりうゝをよりうゝまうつるとしるべし
今その差別をしめすべし
きよりいゝにうつるもの
さいくさ三枝　きさゝ后
さいゝひ幸　すいがい透垣

さいたま埼玉　ついたち朔日
さいなむ可嘖　ついたて衝立
さいつち樫　ついばむ突喰
たいまつ燒松　かいまみる垣間見
かいつく書付　かゝやる搔破
かゝやる搔遣　かいひそむ搔潛
ゐいがしろ輕蔑　ふいご吹籠
をよりいゝゐうつるもの
あいた朝　くゝ串
わたくい私　ゐぐい醯

まいて　況
さむい　寒
ふかい　深
あつい　暑
あさい　淺
浅深（アサイフカイ）などこのクシキの活き詞は皆同じ
かよりうまうつるもの
かうふり　冠
くよりうまうつるもの
かうし　篇子
ひやうし　拍子
さうし　冊子
うう　族
わらうつ　藁鬻
やうやう　漸々

ろおう　論無
ろうさう　祿彩
あさう　淺
あつう　熱
ぬぐう　酸
いたう　最
すげなう　ムタイニ
ふかう　深
さむう　寒
暑寒（アツササムシ）など此のクシキの活き詞ハ皆同し
はよりうまうつるもの
かうたう　革堂
ろうたけ　皮茸
かほほり　蝙蝠
はうき　帚
ふきかう　輔

ひ‖よりう‖ようにるもの

あつまうと　東人　こまうと　高麗人
いもうと　妹人　せうと　兄人
かたうと　方人　まらうと　稀人
れとうと　弟人　やまうと　仙人
ゐなかうと　田舍人　うまうと　杣人
たまうて　給テ

ふ‖よりう‖ようつるもの

ほうし　法師　さうらふ　侍

へ‖よりう‖にうつるもの

まうつきみ　卿　つかうまつる仕

ほ‖よりう‖ようつるもの

あうし　直衣　ならひ　直會

ま‖よりう‖にうつるもの

たうへり　給

み‖よりう‖ようつるもの

かうかき　神垣　かうかい　髮樸
こうち　小路　かうづけ　上野
てうづ　手水　かうべ　神戸

む‖よりう‖ようつるもの

かうなき　巫　　たうけ　手向
かうゝ　柑子　　ひうが　日向
りよりうつるもの
とうで　取手
ねよりうにうつるもの
まうで　詣　　まうづ　參
をよりうにうつるもの
まうす　申　　まうしひらく
以上のうつりよりをのうつりまでは
すべて音の便りにてしかゝふ者あれば

正しくゐもとのまゝよ（さきゐひ）（まをす）
などかくべきなれども文章などの詞づ
かひは口ふいふまゝをうつして音便
にてしるすことあれゞもの詞どもをよ
くあぢはひわきて音便の假字つかひを
さとるべし

假字つかひ早學終

明治廿五年二月四日印刷
明治廿五年二月五日出版

正價金拾五錢

著者　帆足正久

發行兼印刷者　大橋新太郎
日本橋區本石町三丁目十六番地

東京日本橋區本石町三丁目
發兌元　博文館

版權所有

歌の栞

從二位伯爵東久世通禧公題辭
御歌所長男爵高崎正風公題詠
文學博士　小中村清矩君序文
佐々木信綱君著

全一冊背皮金字入上製
正價金一圓郵稅二十錢

目次

（上編）總論○歌の沿革○歌の種類○歌の法則○歌の諸式（中編）歌詞便覽○名所便覽○類題便覽○假字格便覽○冠辭便覽（下編）名歌作例集○作法類語集　以上

歌は文學の神髓にして、其高尚優美なる事他に及ぶべきものなし。然して古來歌學の書歌集の類其數尤多しといへども、未だ完成せる歌學書ある事なし。故を以て、少壯にして歌人の名高く、且歌學者の魁たる佐々木君、未だ大學に在りし時此書を草し、其卒業論文に出されたりき。爾後筆硯を暇あき中より增補改削數歲の星霜を經て、漸く以て千有餘頁の完全せる「歌の栞」を世に公ゝせられたり。其上編は論ぜられたる沿革種類法則は、最も嚴密に最卓越深く、中編は舉げられたる歌詞名所類題假字格冠辭の諸課目は歌を詠する者の、必ず知らざるべからざる所にして、下編は載せられたる名歌作例集作法類語集は、最も卓絶せる秀歌を示し及各語を懇切に說かれたり。古來かつてかくの如く歌に關せる一切の事を網羅せる書ゝしこれ實に編者が數年間の苦心より出たる結果ゝり世の歌人諸君並に歌學に志す諸君、幸に愛讀の榮を賜へ

假名遣枕詞字典

從二位伯爵東久世通禧公題辭
佐々木弘綱、岡野伊平兩先生著

全一冊皮金字入上製美本仕立
正價金五十錢郵稅八錢

假名遣は國語を學び國文を作る人の第一に知らざるべからざるものなり然るを世人動もすれば、いとかくべきをゐと書きをとかくべきをおと書きて讀者の笑を招くは慨歎すべし然れども一度此字典を見ばさる誤りもなく眞正の國文を作るを得べし

枕詞は歌文を脩むる人の朝夕に用ふるものゝよして世人も又常に口に久方の天といひ足引の山と言ふといへども多くは其意義を知るものなし此書は一切の枕詞をあつめ且丁寧綿密ゝ註解を施したるものなり

從來假名遣枕詞ゝ關せる書なきにあらずと雖も本書の如く一切を網羅し完全せる書あることゝおし世の文を作り歌を詠む人は必一本を購ひ座右を離すべからざるものといふべし

假名交文典

前帝國大學總長渡邊洪基君題辭
金鷄間祇侯福羽美靜君校閲
九洋田中渙乎君編述

全一冊和裝美本正價金十錢郵税二錢

目次
受（漢字送假名門　漢字付假名門）
讀法門　辭門　字音門　字訓門　疊字門

文學の隆運に乘じて文章の世ゑ出づる頗ぶる多く青年の文ゑ志すもの亦極めて夥し然れども其の用語假字の誤り甚しく其の文思才藻見るべきものありと雖も止だ用語假名を誤れるがために粗拙の文章とし世に捨てらるゝもの少からず此書ハ此の欠を補はんがためゑ著したるものなり文章ゑ志すもの之を坐右ゑ備へは筆下ゑ完全の文を得べし實ゑ珍重すべき好文典なり先ゑ天皇陛下へ献納し辱も嘉納せられたる良書なり

新撰歌典

第一高等中學校教授　落合直文先生著

全一冊六百廿頁皮金字入堅牢仕立上美本製

正價六十錢　郵税十二錢

歌は文學の最も高尚ゐるものゐり。月夕花晨一たびこれを詠すれば、その快樂實にいふべからざるものあるなり。こたび落合直文先生、本書を著されたり。その目錄は左の如ゝ

目次
●歌の沿革●歌の作法●類語及作例○四季の部○神祇の部○人倫の部○史傳の部○戀愛の部○哀傷の部○天象の部○地理の部○人物の部○動植の部○器財の部○長歌作例●旅頭歌作例●今樣作例●枕詞例

一讀してその面目のあらたまりたるを知るゑ足らん。和歌沿革の如き、作法の如きは最もおもしろく、類語ハ精撰ゑ精撰せられ、征歌は萬葉集を初め、代々の撰集、家々の歌集、最近の歌人の歌に至るまで、そのよきものは漏さず、殊ゑ長歌の如き、今樣の如き、其他の歌躰の如き、大に見るべきものあるあり。かの戀歌といふもの〻忌むべきものを減じ、更に人倫の部を設けられたるなど、最も苦心のところならん。その他和歌書法より、冠詞より、荷も和歌に關したることは、大小漏すところなき。歌を學ばんと欲するものこの書を置きて、他に又何かあらん

日本小文典

錦鷄間祇侯從四位金井之恭公題辭
大宮宗司、星野三郎両君合著

全一冊美裝本正價金十五錢郵税四錢

本書は著者數年間斯學ゑ研究の功を積みし上本邦の語格ゑ關する文法書ハ普く之を涉獵し中に就きて精を拔き華を摘み更ゑ獨得の考案を加へ原則規矩を搆成して始めて完全の小文典を大成せり斯學ゑ志あるもの一度此文典を繙かは本邦の文法上ゐ一大利器を與へて大に其面目の改りたるを知るゑ足らん此書編纂の体裁等先づ其言語を分類するや一々規律に的用し論法明晰に解釋を加へたり而して其例證を擧ぐる苟も卑猥の言辭は悉く是を省き倫理道義ゑ關したる普通解し易き歌文に採れり此等は最も苦心の所にして著者が經營慘憺たる意匠の深きを知らるゝ也本邦文典の大意を知らんとする者此書を置きて又他に何かあらん

百人一首畧解

文科大學學生下野遠光君著

全一冊美裝本正價金十五錢郵税四錢

高樓常峨に泣き破意神魂を飛ばす詠嗟嘆誦千載の下貴賤吟賞の聲を絶たざるものハ定家卿の小倉百首なり然れども彼等知ずして琅誦の境に入る幽婉高雅の名吟又損すると少しとせず本書は親切ゑ名首ゑ解釋を施し何人も一讀すれバ昨直ゑ其神髓を悟了するゑ遺憾なく眞に贈歌の寶典吟誦の錦囊なり

第一高等中學校教授落合直文先生
第二高等中學校教授小中村義象先生　著

中等教育　日本文典

全一冊上製　賣價金六十錢郵税十錢

今國文學ニ深キ落合、小中村ノ二先生、多年刻苦研究シテ、古今散亂セル文法書ヲ參酌シ、更ニ獨得ノ考案ヲ加ヘ、完全ナル文典ヲ大成セリ。其例證ヲ擧グルヤ、極メテ普通解シ易キコトニ取リ、又附錄ヲ附シテ、文法ニ關スル大小一切ヲ網羅ス。殊ニ多年官私ノ諸學校ニ於テ、實地教授セラレタルモノナルヲ以テ、高等諸學校、教科書トシテ、最モ適當無比ナルモノナリ。幸ニ愛讀ヲ賜ハランコトヲ